

# 知的障害特別支援学校における AAC の利用実態に関する調査

—ここ 10 年間の変化と合理的配慮および基礎的環境整備との関連に焦点をあてて—

○藤野 博

(東京学芸大学教育学部)

KEY WORDS: AAC 知的障害特別支援学校 合理的配慮と基礎的環境整備

## 【目的】

藤野・盧 (2010) は 10 年ほど前に東京都内の知的障害特別支援学校における AAC の使用状況について調査し実態を報告した。近年、合理的な配慮と基礎的環境整備が求められるようになり、それらの手段として AAC の活用が含まれると考えられる。そのような動向は AAC に対する教員の意識や学校でのコミュニケーション支援における AAC の使用に何らかの変化をもたらしたのだろうか。このような問いのもとに、東京都内の知的特別支援学校を対象とした AAC の利用実態と教員の意識について質問紙による調査を再度行い、藤野・盧 (2010) の知見と比較するとともに、合理的配慮と基礎的環境整備への今日の要請が AAC の利用に影響を与えているかについて検討した。

## 【方法】

### 1. 対象者

東京都内のすべての知的障害特別支援学校・学部 (47 校 91 学部) に質問紙を送付し、学校長が指名した回答者一名に回答を依頼した。回収数 (率) は小学部 16 校 (55%)、中学部 17 校 (58%)、高学部 18 校 (54%) であった

### 2. 手続き

藤野・盧 (2010) に準じ 7 つの下位項目を設定するとともに、合理的配慮と基礎的環境整備の下位項目を設定した。合理的配慮の項目は、(1) 各種の AAC ツール (コミュニケーションブック、VOCA、タブレット端末など) を使用した学習内容の変更・調整を行っている、(2) AAC ツールによる情報・コミュニケーション及び教材の配慮を行っている、(3) 幼児児童生徒、教職員、保護者、地域の AAC ツールの理解啓発を図っている、(4) AAC ツールを災害時等の支援の際に使用する準備をしている、からなる。基礎的環境整備の項目は、(1) AAC ツール (コミュニケーションブック、VOCA、タブレット端末など) について専門性のある指導体制を確保している、(2) 個別の教育支援計画や個別の指導計画を AAC ツールの使用を前提として作成している、(3) AAC ツールを教室に配備している、(4) 学校経営計画に合理的配慮と基礎的環境整備に相当する取り組みが記載されている、からなる。

## 【結果】

### 1. 各質問項目の回答結果

#### (1) AAC の使用状況

絵カード、写真カード、文字・単語カード、身振りは 90% 以上、マカトンは 80%、タブレット端末は 76%、図形シンボルは 73%、コミュニケーションボードは 66% の回答者が使用していると回答した。コミュニケーションブック、オリジナル身振り、VOCA、パソコンはいずれも 50% に達しなかった。

#### (2) 必要だと思うコミュニケーション手段

絵カード、写真カード、文字・単語カード、身振り、タブレット端末は 90% 以上の回答者が必要と答えていた。

#### (3) 使い方を教えるのが難しいコミュニケーション手段

パソコンが 75%、タブレット端末が 66%、VOCA が 65%、コミュニケーションブックが 59%、コミュニケーションボードが 52% であった。

#### (4) 校内における AAC に対する取り組み

「学校の方針として AAC の導入に積極的である」は 62% であったが、他の 4 項目のうち 3 項目で肯定的な回答が 50% を下回っていた。

#### (5) AAC を利用したコミュニケーション指導

「AAC を使ったコミュニケーション指導を授業中に行っている」など全項目で肯定的な回答が 50% を超えていた。

#### (6) AAC 手段の使用における不便さや問題

「AAC ツールを作るために使える教員の時間が足りない」が 92% で最も高く、その他 9 項目中 5 項目で 50% を超えていた。

#### (7) AAC に関する教員の知識

「AAC という言葉を知っている教員は多い」が 52%、「どの AAC システムを活用すれば、児童生徒に有効であるかを把握している教員は多い」が 52% であったが、「業務の忙しさによる時間不足のため AAC についての知識を吸収し導入するだけの余裕がない」が 85% であった。

#### (8) 合理的配慮

「学習内容の変更・調整を行っている」は 75%、「情報・コミュニケーション及び教材の配慮を行っている」は 81% であったが、「AAC の理解啓発を図っている」は 31%、「AAC を災害時等の支援の際に使用する準備をしている」は 22% であった。

#### (9) 基礎的環境整備

「専門性のある指導体制を確保している」は 61%、「個別の教育支援計画や個別の指導計画を AAC の使用を前提として作成している」は 67%、「AAC を教室に配備している」は 74%、「学校経営計画に合理的配慮と基礎的環境整備に相当する取り組みが記載されている」は 87% であった。

## 2. 項目得点間の相関係数

「AAC の使用状況」「校内における取り組み」「コミュニケーション指導」の項目得点は「合理的配慮」および「基礎的環境整備」の項目得点との間に有意な正の相関がみられた。

## 【考察】

藤野・盧 (2010) が報告した 10 年前の状況と比較すると、AAC 手段を教えることの困難感は変わらないが、使用は全般的に促進されていることが明らかとなった。とりわけ注目されたことは、VOCA の使用率は著変がないものの、タブレット端末は 70% を超える高い使用率であったことである。障害に対する支援に用途が限定されない汎用的な機器の市販が、ICT 利用への物理的・心理的障壁を下げたと考えられる。また、合理的配慮は多くの学校で行われていた。その施行の中で AAC も使われるようになったことが推測される。基礎的環境整備については、校内での研修会や情報提供の場といった組織的な校内の取り組みの体制がまだ整っていない学部があることが示唆された。

## 【文献】

藤野 博・盧 熹貞 (2010) 知的障害特別支援学校における AAC の利用実態に関する調査研究. 特殊教育学研究, 48, 181-190.

(FUJINO Hiroshi)